四国大学紀要，(A)37：159－170，2012
Bull. Shikoku Univ. (A)37：159－170，2012

「瑞麟山丈六寺十景詩画巻」の世界

須藤茂樹

はじめに

徳島県徳島市丈六町丈領に所在する瑞麟山慈雲院丈六寺は、曹洞宗の古刹で、県内有数の文化財を所有することで知られる。丈六寺は、徳島市域の南部を南北に流れる勝浦川の左岸に位置し、境内一帯が県の史跡に指定されている。寺伝によれば、白鳳年間の創建ともいわれ、行基が刻んだ丈六の観世音菩薩坐像が寺号の由来とされる。所在地も移転説、現在地説といろいろあり、創建時から室町時代までの来歴については未詳の部分が多い。室町時代の明応元年（一四九二）、阿波守護の細川成之が小松島桂林寺住持の金岡用兼を開山に招いて、現在地に禅宗寺院として再興した。三門、本堂（元方丈）、観音堂、経蔵（旧僧堂）、聖観音菩薩坐像、細川成之画像は国の重要文化財、書院、徳雲院は徳島県指定有形文化財、雲版、大蔵経は徳島市指定有形文化財に指定されている。(1) 指定文化財以外にも、徳島藩主蜂須賀家寄進の品々をはじめ、寺宝や歴史資料が数多く伝来している。また、境内には、細川成之・持隆・真之三代の墓や巨大な蜂須賀家重臣の墓が点在している。

本稿では、丈六寺の寺宝の内、江戸時代の丈六寺の景観を絵と詩で表現した「瑞麟山丈六寺十景詩画巻」を紹介したい。(2)

「瑞麟山丈六寺十景詩画巻」について

本詩画巻は、瑞麟山丈六寺の境内とその周辺から十景を選んで詩と画で表現した巻物である。紙本著色で、法量が縦二七・七㎝、横八四一・七㎝である。箱書や序文、跋文などから、制作時期は享保九年（一七二四）八月、作者は詩が丈六寺十六世住持凸巌、絵が絵師の重清長巴である。凸巌養益は、正徳四年（一七一四）に入院し、享保一七年（一七三二）に寂している。重清長巴は、諱が久勝、通称は六太夫、号は長巴といった。徳島城下富田浦の出身で、藩士重清源八常積の次男である。戸村春重の養子となる。藩絵御用を務めたというが、作品はほとんど確認されておらず、本稿で紹介する「瑞麟山丈六寺十景詩画巻」のほかに、丈六寺に「涅槃図」が残されている。長巴は、明和八年（一七七一）一月二十二日病死している。(3) 箱書には「畫師　重清長巴十五歳」とあり、十五歳の時の手になることがわかる。

序文によれば、執筆の動機について、凸巌和尚は「丈六寺に居住して十一年が経過したが、この八、九年経典に向かいながら深い歴史のある当山に着眼してきた。ところが、享保九年八月になって腰痛となり、動けなくなった。詩に詳しいわけではないが、読んでもらうために、痛みを堪えて詩をつくった。老僧のことばをならべただけ。さまざまな古典の注釈書を参考にしながら、よくわからない言葉の飾り方をして詩に綴ったものだ。」

と見える。

本作品により、瓔珞桜など現在は確認することができない境内や周辺の景勝地や状況を知ることができる。

構成は以下の通りである。

序文
①主辰中峰　寺背西距寺一里曰中津峰観音立用為主山
②前案柴山　東距寺半里程當寺前横備于本山用為案山
③勝浦流水　舊勝浦通田浦山下経公問名祝勝于未前
④一本界松　在羅漢門前清溝水之畔
⑤羅漢偃松　在知客寮其幹亭々其形如擎青羅傘蓋
⑥四派霊杉　在殿前正徳院殿有命所植也
⑦不變楼桂　倭曰蘇鐵本草名鐵甦樹正徳院殿令樹之
⑧瓔珞櫻　開祖化峰　在観音堂窓南永正乙亥仲冬十五上茲跡
⑨正徳鐵樹
⑩三尺坊
跋文

「瑞麟山丈六寺十景詩画巻」の紹介

木箱蓋表に「瑞麟山十景」「筆三号」（貼紙）、同蓋裏に「十六世凸巌釋」、同底内に「畫師重清長世十五歳」、同底裏「十景寫　凸岩新添」と墨書されている。本紙は、以下の通りである。

瑞麟山丈六寺慈雲院
十題并引

大凡物無名則在而齊烏有
物無不有名假雖有名而不挙
称則不如無名不称揚則失諸有
称之諸之其実顕於名人讀記於
心語於口廣流多人之見聞固於鉄
摩銅庫昌古従来蘇山岡聯題
故勒舊郷党不知有実在多況新
錫他方来之雲客乎老僧不学文字
不讀異典住持十一年于茲而不知
本寺内外之差別一山古今之要節
而経居諸既八九年也近僅傳於傳
説心於心頭茲載享保九年甲辰八
月為疝魔被縛腰半臥半坐不見
家旬餘思念光陰如箭老躬此方
欲立題貽於後令讀者知有以或誚
好事或喜是誚喜二為山之護持痛
苦之罅隙力探題逐題賦絶句素
不与詩騒則顓述題之由縁于句中
爾老僧唯煩才暗識断解伊呂波

仁保辺登者則阿耨多羅三藐三
菩提之翻名而未学正翻譯語之内
外墳典故不弁文筆之助字字位
之顛倒不是殺青傳世者素加国
字讀的之者奚労于草案仮書著
作稽古譯于書引故事於尋伺之聞
用奇藻艶彩之言句茲文綴詩為
耶

引…序文のこと
殺青…油抜きの竹簡
貽…おくる、のこす
誚…せめる、なじる、そしる
顓…もっぱら、ほしいまま、おろか
伊呂波仁保辺登…いろはにほへと
奚…いづくんぞ、なんぞ

十景題詠

瑞麟山十景

①主扆中峰　寺背西距寺一里曰中
津峰観音立用為主山

扆…衝立、かくれる、かくす、おくぶかい
津峰観音…中津峰山如意輪寺のこと。本尊如意輪観音菩薩坐像は重要文化財。

絵
山々のなかに中津峰山如意輪寺が見える。手前は勝浦川。

寺背中峯聳後囲、用
為丈六金身扆、此彼
一體俱観音、孰主孰
賓絶頭尾

②前案柴山　東距寺半里程當寺前
横備于本山用為案山

距…へだてる

絵
山々を描く。

山脚横跨丈六前、霞如
展緤簇祥烟、主人隠
八風翻巻、説法樹林
億萬年

祥烟…めでたい煙

③勝浦流水　舊勝浦通田浦山下経公
問名祝勝于未前

経公…源義経のこと。源平合戦の際、源義経は阿波勝浦に上陸し、大坂峠

から讃岐に入り、背後から平家が立て籠もる屋島を奇襲した。

絵
勝浦川に渡し舟が見える。

勝浦元通
　田浦前
義経載海寄兵舩、爾
来唯見桑田変、疏鑿
合流丈六川

疏鑿…山などを切り開いて川が流れるようにすること

④一本界松
絵　勝浦川の手前の老松の下に人物二人が見える。

八町門前界樹松、
　勝川崩岸伐令空、
為坊虞芮競争訟、唯
　剰一根示界窮

虞芮競争訟…虞は中国の山西省甲陸県地方に、丙は陝西省朝邑県地方にあった国名。この国の人が田地の境界を争い、西伯（周の文王）に裁いてもらうために周にいったが、周の人の道徳の正しいのに感じ入り恥じて争いをやめたという伝説がある。

⑤羅漢偃松　在羅漢門前

清溝水之畔

絵　鐘楼・二の門・三の門とあり、二の門の下に老松が描かれている。水路の際、すなわち現在の四阿の辺に老松が描かれている。この株は現在もある（四阿の所）。現存する三門は室町時代末期の建造で、昭和二十八年（一九五三）三月三十一日に国の重要文化財（建造物）[4]に指定されている。

羅漢門前流水畔
　蓋天垂地千年
松、孰擎緑傘蔭
凉老、坐者影響扶
　祖宗
擎…捧げる、掲げる

⑥四派霊杉
絵
白壁の手前に天に向いてのびる杉を描く。
幹が四本に分かれて、いずれも上に向いている。

霊杉一根抽四幹、
一齊百尺若長竿、
應標四派無優劣、
冥理自然天地貫、

⑦不變老桂　在知客寮其幹亭々
其形如擎青羅傘蓋

知客…接待係の僧のこと
「知客寮」とは現在の書院を指すのであろうか。
擎…捧ぐ

絵
桂を描く。上と下に葉の集合がある。
稿秀堂前如脇綠、傘段
無襄変契禅、叢異
香雪色艶花、拝老桂
千年起祖風

稿秀…稿客の書き間違いか

⑧瓔珞旒櫻　在殿前正徳院殿
有命所植也

瓔珞…仏像の装身具、仏具、建築物の垂具
旒…垂れる、枝垂れ
殿前…本堂の前のことか
正徳院殿…正徳院殿乾室了外大姉。蜂須賀至鎮の二女万。旗本水野十郎左衛門成元母。天和三年（一六八三）九月七日没。成元（一六三〇－一六六四）は、寛永七年の生まれで、父は水野成慎（福山藩主水野勝成三男）、徳川家綱に仕官し、三千石を得た。その姉や子は賀島や稲田氏など蜂須賀家重臣に嫁いでいる。行跡怠慢により、寛文四年三月に自刃を遂げている。

絵
仏像の飾りの瓔珞のように垂れ下がる枝垂桜一本が満開に花開く。
殿前櫻樹十尋
脩、冬繋金懸春
串球、正徳尼公栽
奉佛、永懸櫻珞
百千旒

尋…一尋は六尺（一・八二m）、中国では八尺

⑨正徳鐵樹　倭曰蘇鐵、本草名鐵甦
樹、正徳院殿令樹之

鐵樹…倭名は蘇鉄、本草名は鉄甦。

絵
小窓と濡れ縁のある堂宇の横に真っ直ぐにそそり立つ蘇鉄を描く。
鐵甦怪樹
和龍鬚鱗甲蟠枉手
握珠抜地騰天殊志
筆尼公捐命爰孤

鐵甦怪樹…鐵は鉄の異体字。ここでは蘇鉄を指す
枉…曲げる
蟠…屈み曲がる、とぐろを巻く

⑩三尺坊

開祖化峰　在観音堂窓南、永正乙亥
仲冬十五上茲没跡

観音堂…蜂須賀忠英の建立。平安時代作の「木造聖観音坐像」（重要文化財）を安置する。昭和二十八年三月三十一日国指定重要文化財。

開祖化峰…金岡用兼のこと

仲冬望…十一月十五日

絵

勝浦川に臨む小山に古松数本あり。

吾祖多誤難見聞、
洞雲雷動雨慈
雲、公山永正仲冬
望、没跡至今不帰
分

洞雲…金岡用兼

秋葉三尺坊の伝説が残る。人物についての詳細は不明であるが、戦乱の世火災に苦しむ人々を救うために香を燻じて立ち上る煙によって火を消す鎮火の秘法を感得した～という。永正年間、阿波の丈六寺の金岡用兼との関係で興味深い。

右所記十題之詩者、凸翁
和尚禅餘所詠也、其詞不
加藻飾而、自然為章蓋蟲
蝕木而、為文豈有意彫刻
耶想老師従自在三昧裡流
出者也、丁未之冬予偶膽病之
次、老師出斯巻命予謄寫頻
辭、不赦漫筆以塞其責而小已、
岩享保十二仲冬
檗下沙門瑞泉龍潭珠拝書

凸翁和尚…丈六寺十六世凸巌和尚。

丁未之冬…享保十二年（一七二七）

膽病…膽は肝のことで肝臓病を指すか

奥書跋文を記した「檗下沙門瑞泉龍潭珠」については、現在の所特定し得ないが、黄檗宗であることから、竹林院（徳島市八万町中津浦）か成願寺（小松島市中田町奥林）いづれかの住持ではないかと考えている。

おわりに

以上、丈六寺所蔵「瑞麟山丈六寺十景詩画巻」を紹介してきた。本作品は、勝浦川の清流に隣接した禅宗寺院特有の清新な建造物が自然と美しい調和を保っている江戸時代の丈六寺とその周辺の姿を描いたものとして貴重である。住持凸巌養益が、病気をおして筆を執った、想いのつまった渾身の労作である。また、絵師清重長巴の数少ない作品としても注目される。さらに、享保年間制作は、「養性軒十六詩」（七条寿庵詩・赤井得水書・佐々木信照絵）の享保八年（一七二三）に次ぐもので、阿波に残された絵画作品としても古い部類に属する。さらに、「養性軒十六詩」、「鳴門十二勝景図画巻」（鈴木芙蓉筆　寛政8年（1796））、「阿波八景図画巻」などと

ともに近世阿波の景観を描いた作品としても重要である。

（1）「丈六寺」の項　「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典　36徳島県』（角川書店　昭和六一年）、藤目正雄『丈六寺の姿』（藤目正雄退職記念刊行会　昭和三二年）。

（2）丈六寺顕彰会編『阿波　丈六寺』（丈六寺顕彰会　昭和五三年一一月）。

（3）「丈六寺　三門」など　『徳島市の文化財』編集委員会編『徳島市の文化財』（徳島市教育委員会　平成一四年）。

（4）「清重長巴」の項　福田憲熙『阿波画人志』（原田印刷出版㈱　平成七年）。

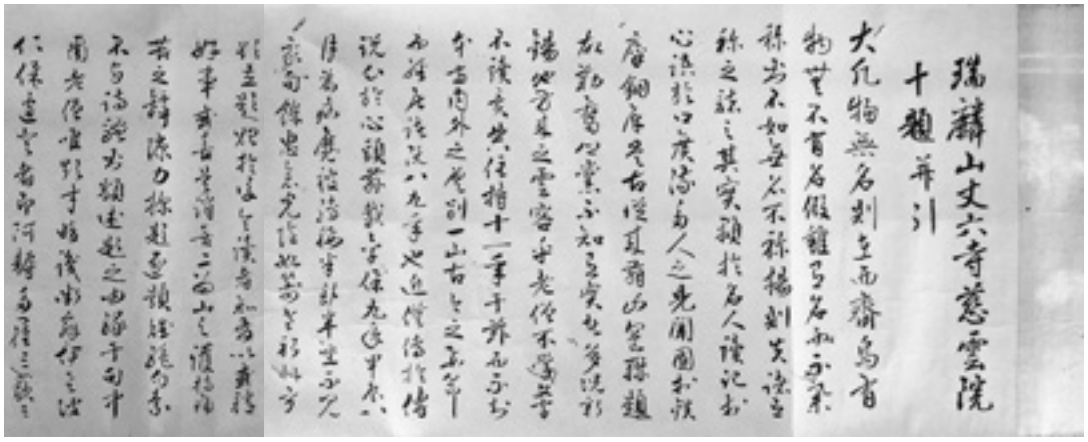
［付記］

本稿の骨子は、平成二十三年十一月一日の丈六寺秋の特別公開に伴う講演会「「瑞麟山丈六寺十景詩画巻」と近世阿波の名所絵・真景図の世界」で報告させていただいた。

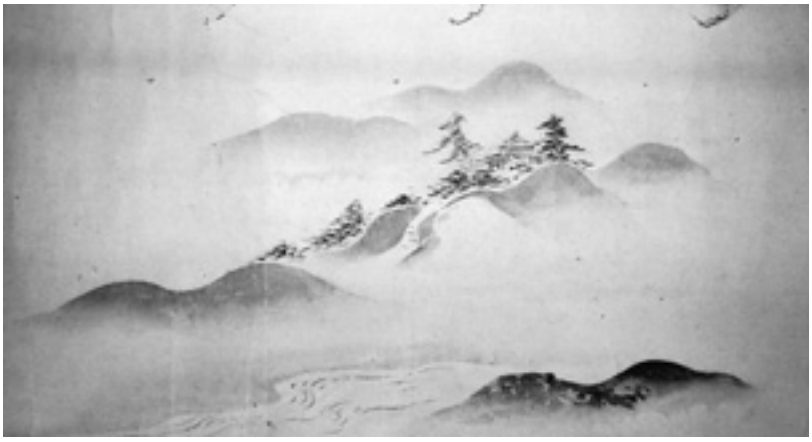
本稿を成すにあたって、便宜を図っていただいたご所蔵者の丈六寺様、とりわけ御住職様及び奥様、解読にご協力いただいた郷土史研究家の高田豊輝氏、本学文学部日本文学科の佐伯雅宣氏、同書道文化学科の森上洋光氏には深甚の謝意を表する次第である。

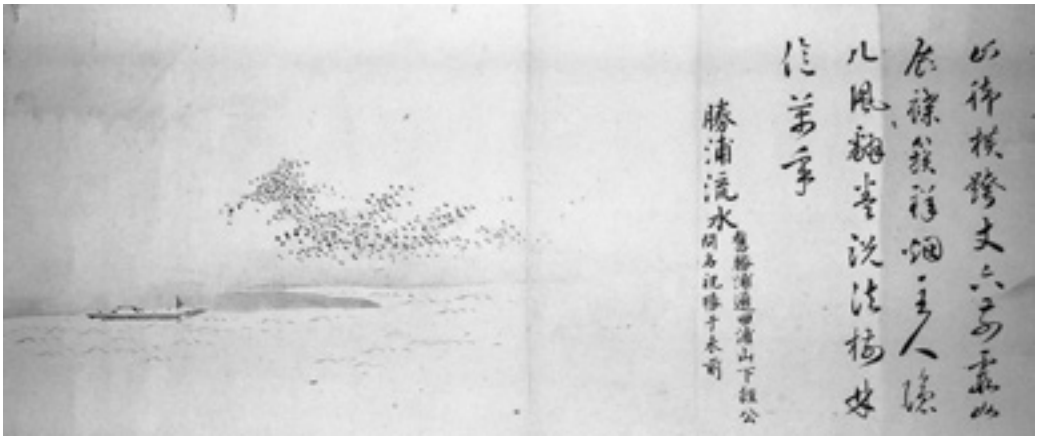
なお、難解な文章であるため、かなりの誤読があると思われ、皆様より御指摘をいただき、訂正していければと考えている。

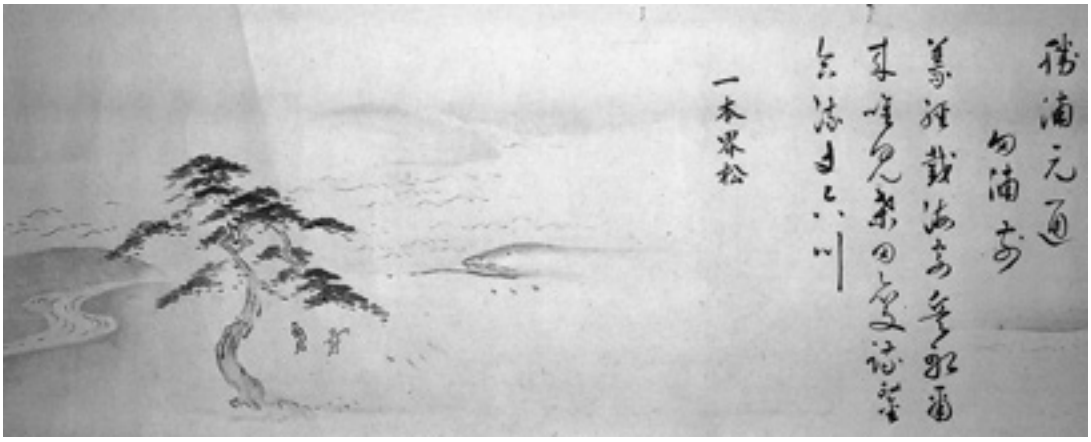
（すどう　しげき　四国大学文学部日本文学科　日本文化史研究室）

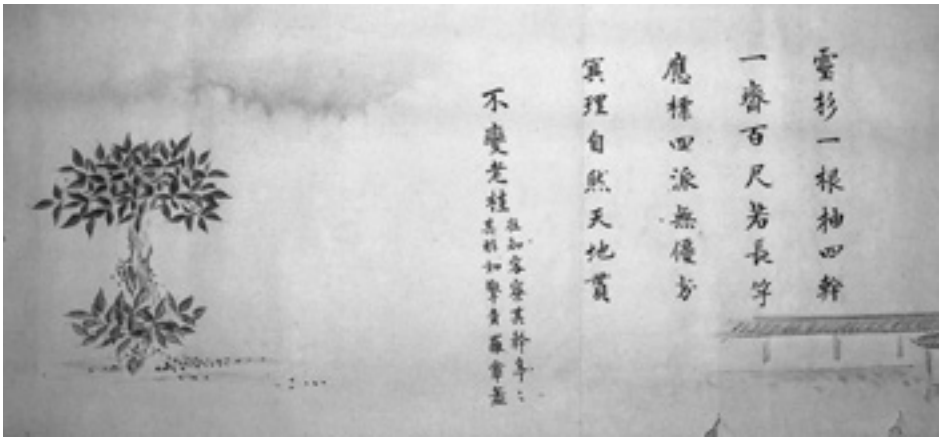

瑞麟山丈六寺慈雲院
十題并引

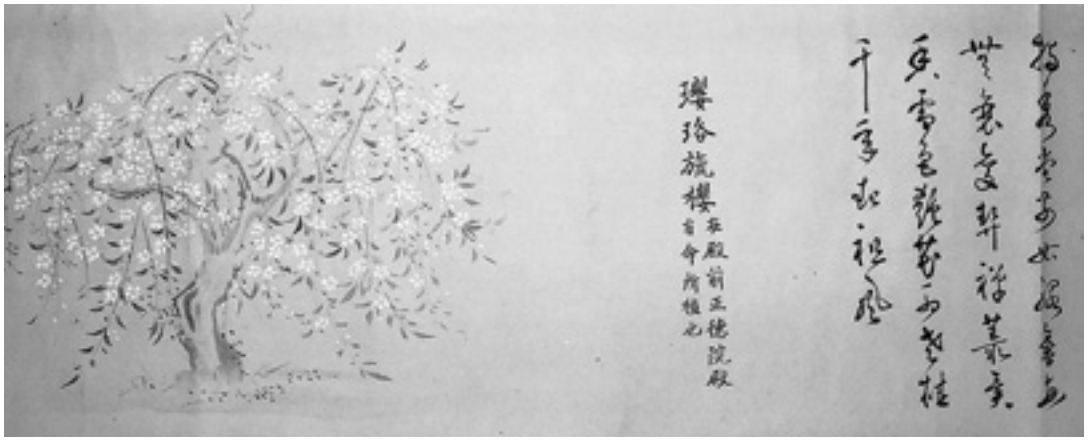
十景題詠
瑞麟山十景
主席中峰



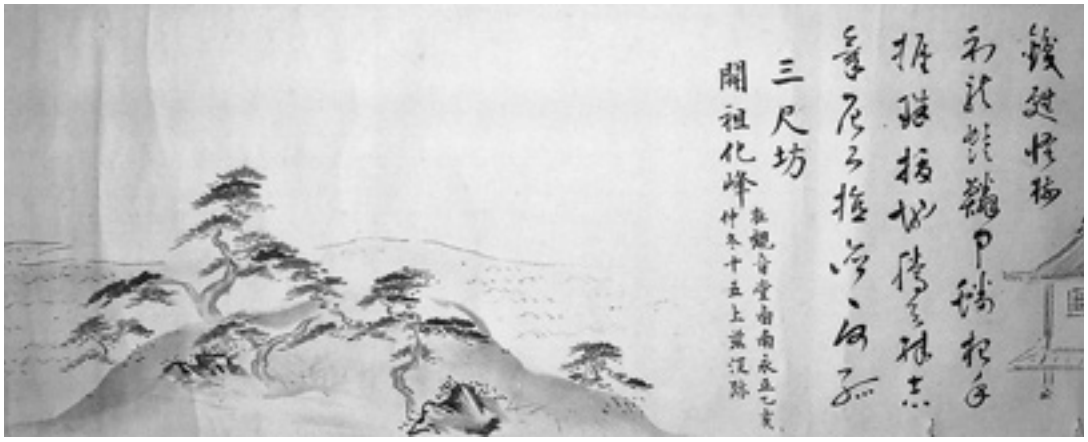


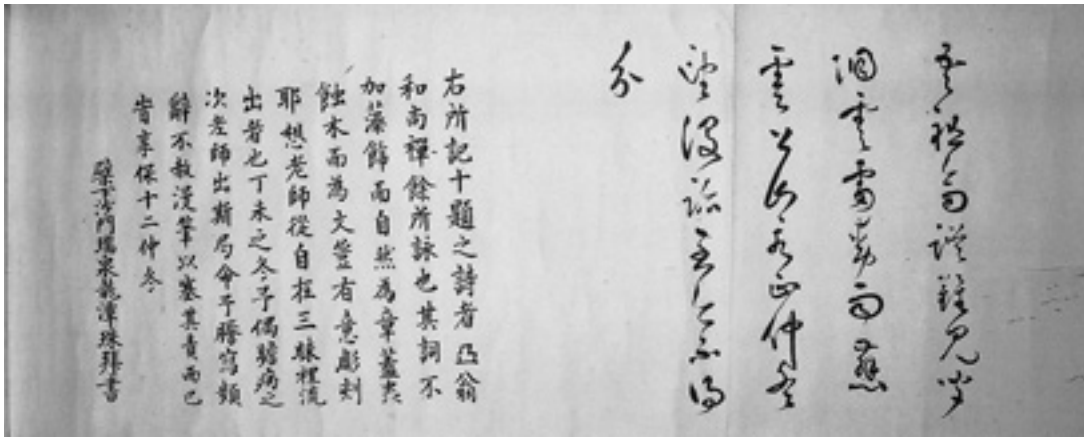





瓔珞旗樓 本殿前正德院殿
旨命所植也

正德鐵樹 俗曰蘇鐵本州名鐵熱
樹正德院殿命樹之


三尺坊
開祖化峰 本觀音堂南南永五乙亥
仲冬十五上旋泛除



右所記十題之詩者五翁
和尚禪餘所詠也其詞不
加藻飾而自然為章蓋表
蝕木而為文豈有意彫刻
耶想老師從自在三昧裡流
出者也丁未之冬予偶罹病之
次老師出斯局命予謄寫頗
辭不敏漢筆以塞其責而已
皆享保十二仲冬

壁下沙門瑞來龍澤珠拜書